The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ポストコロニアル・フォーメーションズ(3)　序言
Author(s)	
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2008, 2007
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77334
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

序　　言

この言語文化共同研究プロジェクト報告書は、昨年度と一昨年度に刊行した同じタイトルの報告書の続篇にあたり、「シリーズ」としては3冊目になる。昨年度までと同様、大阪大学大学院言語文化研究科の教員と院生をおもなメンバーとする研究会「ポストコロニアル・フォーメーションズ」（略してPCF）がその基盤となっている。この研究会は、ポストコロニアル研究およびカルチュラル・スタディーズの理論、ポストコロニアル文学や現代の移民文学、日本を含めた世界各地の植民地主義とその現代における影響などの研究領域を通して、近現代世界における文化形成のありようを分析することを目的としているが、その「フォーメーションズ」という言葉には、文化に対する私たちの視座そのものを新たに形成し直すという意味、さらにいうなら、それを未来の文化形成に向けて投射するという企図も含まれている。

もちろん、PCFのメンバーの個々の関心の焦点はさまざまであり、研究会として統一的な方針をとっているわけではない。この報告書で扱われる題材も多岐にわたっている。近年の「コスモポリタニズム・リバイバル」の問題から、今年40周年を迎える「1968年」の歴史的な意義、異文化表象とモダニズム文学の語りの問題、今世紀に入ってからノーベル文学賞を受賞した二人のポストコロニアル作家、ナイポールとクッツェーに、アメリカの黒人作家ハーストンの文学テクストの分析、フィジーにおける先住民とインド系移民の問題、等々である。しかし、毎月の「ポストコロニアル・フォーメーションズ」研究会の積み重ねが、それぞれの議論のどこかに活かされていることはまちがいないだろう。

ところでPCFには、言語文化研究科の修了生など、制度上プロジェクトの「正規メンバー」には加わることのできない会員も何人か参加しているが、しかしこれらのメンバーを抜きにして、この研究会は成り立たない。この報告書のメッセージは、まずはこれらの「共同研究者」たちに、感謝もこめて贈り届けたいと思う。